日文教育資料

教育情報

これからの時代に求める若者像

2号

これからの時代に求める若者像

《特集》
若者に期待を寄せて…… p.2-3
東京大学　磯田文雄
無限の可能性と、人を動かす熱意…… p.4-5
パナソニック株式会社　小川理子
《発信！北から南から…》
佐賀県が進めるICT利活用教育の現状と事業目的… p.6-7
佐賀県教育庁　福田孝義
《クローズアップ！教育の現場》
教師の眼・子どもの目…… p.8
元会津若松市立第二中学校　室井文輔

日本文教出版 Web サイト
最新情報はこちらから➡ 日文 検索
http://www.nichibun-g.co.jp/

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

若者に期待を寄せて

東京大学　磯田 文雄

■ゆとり世代■

大学にいると「ゆとり世代」という言葉が、否定的な意味で使われている。平成10年の学習指導要領で学んだ学生は、ゆとり教育を受けているため、学力が低く、教育の負担が大きく、いわば大学の教員にとってはやっかいな学生であるというのである。

学習指導要領が変わっただけで学生の学力が大きく変化するものなのだろうか。それほど、教育課程行政には強力な影響力があるのだろうか。それだけでなく、「ゆとり世代」の若者はなぜ大学において教員から冷たい目で見られ、劣等感を持って生きていかなければならないのだろうか。

■経済成長を知らない世代■

大阪大学の鷲田清一（わしだきよかず）前総長は、東日本大震災（2011.3.11）直後の卒業式を終え、次のように語っている。「私はこの春の卒業式に臨んで、しみじみとした感慨を抱きました。震災直後だったということもあるのですが、ああこの子らが阪神・淡路大震災のことを体で覚えている最後の世代なんだなあと思ったからです。同時に、明日は今日より良くなるという経験を一度も味わっていない最初の世代なんだなあと思って、じーんときたのです。バブルを思春期に経験した世代以降、明日は今日よりもひどくはなっても良くはならないと感じている人たちは、明日はどうなるか分からないという昔の人のマインドに近いのかもしれない。」（阪大ニューズレター No.52, 2011・6・Summer）

これに対し、同大学コミュニケーションデザイン・センターの小林傳司（ただし）教授は、「私は学生に、『経済成長している社会ってどんな社会ですか』と聞かれました。なるほど、彼らが物心ついてからずっと成長していない。日本がどんどん豊かになっていく時期が成長期と重なっていた私たちのほうが、特殊な世代なのかもしれません。」（同上）

そうなのです。平成3年のバブル経済崩壊以降、日本の経済はよくなっていない。そんな中で育ってきた若者を、経済成長の恩恵を受けて生きてきた大人の世代が、その大人の基準で評価するのはよくありません。もっと若者の視点に立って考えるべきでしょう。

■活躍する日本の若者■

2009年の国際数学オリンピックにおいて筑波大学附属駒場高校3年生副島真（そえじままこと）さんが104カ国・地域から565名の選手が参加した中で、全選手中１位の快挙を遂げるなど、数学・化学・生物学・物理・情報等の国際科学オリンピックやロボット等の国際科学技術コンテストで日本の

若者が優秀な成績を収めている。かつては、日本の若者は創造性がないとか、数理分野では欧米や中国には勝てないとか言われていたが、そのような固定観念を打ち砕く若者の活躍が目立っている。これからこのような日本の若者の活躍がもっともっと期待できるものと考えている。

■知識基盤社会■

今我々は「知識基盤社会」(knowledge-based society)に生きている。「知識基盤社会」とは、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化を始めあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会のことを言う。

「知識基盤社会」の特質としては、例えば、①知識には国境がなく、グローバル化が一層進む、②知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる、③知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要となる、④性別や年齢を問わず参画することが促進される等をあげることができる。(「我が国の高等教育の将来像」(答申)中央教育審議会、平成17年1月28日)

知識基盤社会を前提に考えれば、男性中心の社会である必要がないのは言うまでもないが、若者の積極的な社会への参画が求められる。パラダイムの転換を伴うような改革は、経験の蓄積だけでは実現できない。新しい視野と感性を持った若者の参画が是非とも必要である。

これまで日本は同質性の高い国であることから様々な成功を収めることができたと言われてきた。しかしながら、知識基盤社会においては、むしろ多様性が必要であり、社会構成の非均質性が社会的・経済的活力の源泉となると考えられている。若者の活躍が強く求められるのである。

■グローバル化■

「1980年代までの『グローバル化』は外部世界を日本の側からグローバル化することを事実上意味していたとすれば、90年代後半以降の『グローバル化』は日本のシステムが『グローバル化される』過程にほかならなかった」(佐々木毅『政治学は何を考えてきたか』筑摩書房、2006年、162頁)。日本標準、日本の基準は通用しないのである。グローバルな基準で社会が、政治が、経済が運営されるようになってきたのである。

若者を「ゆとり世代」と言って悪く言うのはやめよう。これからの社会は、若者の活躍にかかっている。若者を大切にし、若者が活躍できるよう環境を整えよう。

●著者プロフィール●
磯田 文雄(いそだ ふみお)
国立大学法人東京大学理事
昭和 52 年文部省入省、昭和 59 年 11 月から 63 年3月まで香川県教育委員会事務局に勤務、文化行政課長及び義務教育課長を務める。その後外務省に出向、昭和 63 年 5 月から在豪日本国大使館一等書記官を務める。平成 3 年に帰国後、大臣秘書官事務取扱、初等中等教育局企画官、教育助成局海外子女教育課長、地方課長を歴任後、平成 18 年私学部長、平成 20 年研究振興局長、平成 22 年高等教育局長を経て、平成 24 年 1 月から現職。

無限の可能性と、人を動かす熱意

パナソニック株式会社　理事
ブランドコミュニケーション本部
ＣＳＲ・社会文化グループ　グループマネージャー
小川 理子

■脳が喜んだ！■

以前こんな経験をした。家の近くの万博記念公園に、紅葉を楽しみに行った時のこと。

アプローチの道路を隔てて、一方は何千台もの車が停まる駐車場、一方は様々な木々がハーモニーを奏でる日本庭園。私は最初なにげなく駐車場を眺めながら歩いていたが、ふと反対方向に視線を移し日本庭園を見た瞬間、頭の中でバリバリバリバリという音がして、目の前の視界がスーッと開ける気がした。これぞ、脳が喜んでいる、という現象だと思った。

脳科学者がよく、脳が喜ぶ、という表現を使っているのを気にはしていたが、自分自身が体験するのは初めてだった。何千もの同じような形の人工物が、同じ間隔で並べられたパターン認識と、色とりどりの多種多様な自然の木々が秋風にそよぐ風景を、一瞬のうちに比較した脳は、主体者である私に考える隙も与えず、「生きる力」を放出したのだ。

近頃、自然環境と生物でも多様性、企業の生産性向上でも多様性、学校教育でも多様性、と言葉は花盛りであるが、なるほど、生命の根源とは、そのように多様性を喜んで受け入れるようにできているのだと納得できた。

■若者の日常はどうなっている！?■

そこで、若者の日常について考える。生まれたときからデジタル機器に囲まれ、日常生活では半径１ｍ以内で世界の情報をリアルタイムに手に入れることができる。そんな環境のもとで、子どもたちは世界を認識しながら育っていく。ソーシャルメディアで誰とでも、スマホとタブレットでどこででも、時間と空間を自由自在に行き来して、スマートなコミュニケーションをこなそうとする。検索すれば何でもわかる気になる、多様な情報世界を覗き見して理解している気になる。ツールを手段として使っているうちはまだしも、いつしか時間は細切れになり、空間には明暗も濃淡も奥行きもなくなり、気がつくと、苦労せずとも便利な世界にどっぷりと浸かりきっていないか。

ある夏の日、全国から選抜された理科好きの中学２年生40名の集まりにおいて、宇宙飛行士が講義をしていた。

「宇宙に行きたい人は？」と飛行士が問いかけると挙手はゼロ、

「では、海外に行きたい人は？」と問いかけると挙手はぱらぱらと数名。
「たったそれだけ？なぜみんなは海外に行きたくないのか？」と問いかけると、ある男子生徒が「東京にいる方が楽しくて便利で世界のこともわかる。」と、答えた。

その場に居合わせた私は、子どもたちのあまりの好奇心の無さに驚き、将来、世界を相手にしなければいけない自分の「行き方」に挑戦する気力さえなくしているのかと心配になりながら、小中高と成長するにつれて、将来就きたい仕事について、「ない、考えたことがない、わからない。」の比率が高くなるというデータも頭をよぎったが、これも半径１ｍ以内の日常生活に起因しているのかもしれない。

■外に出よう、武者修行をしよう■

これからの時代、予測不能で変化の激しい世界との距離感はますます縮まっていく。好むと好まざるとに関わらず、多様な主体が協働しなくては生き残れない時代になる。しかし、そんな状況を、もともと脳が喜んで受け入れて「生きる力」を放出する能力が人間には備わっているのだから、恐れず外に出ていけばいい。外に出て、五感を、あるときはダイナミックに開放し、あるときは繊細に研ぎ澄ませて、知らない刺激を吸収したときに、自分が認識していた過去の限界を打ち破ることができる。この世界、何と自分の知らないことが無限にあることか、を素直に実感できる。と同時に、自分自身の無限の可能性にも気づけるのだ。

■人と社会を動かす熱意とは■

これからのグローバル時代においては、自分の考えを論理的に述べる、他者と議論できる、多様な文化を理解しお互いに尊重できる、ことが基本的に重要なことである。そのうえで、リーダーシップを発揮したり、社会の変革に貢献したり、自己実現を図るには、人と社会を動かすだけの熱意をどれだけ持っているか、ということである。熱意は、学力や知識から得られるものではない。人類や世界のために役立ちたい、という強い使命感からくるものである。

●著者プロフィール●
小川 理子（おがわ みちこ）
大阪市生まれ。慶應義塾大学　理工学部卒業後、松下電器産業（株）（現パナソニック）入社。
音響研究所、ネットワークサービスエンジニアリングセンターなどを経て現職。
パナソニック教育財団理事、パナソニックスカラシップ（株）社長を兼任。
経団連「教育と企業の連携WG」座長、日本工芸会近畿支部副支部長、WWF理事ほか。

発信！北から南から…

佐賀県が進める ＩＣＴ利活用教育の現状と事業目的

佐賀県教育庁教育情報化推進室　室長　福田 孝義

我が国では、現在、少子高齢化、高度情報化の進展など、社会構造の変革が進み、求められる仕事内容や職種も大きく変化してきているが、私は、社会経済を維持し、発展させるためには、常に新たなる人材の育成と供給が必要であり、それを担うのが教育であると考えている。

教育の場においても、世界規模で高度情報化の取り組みが急速に進む、社会生活のあらゆる場面において「いつでも、どこでも、誰でも」簡単に情報通信ネットワーク網につながり、インフラ環境が整備されることとなり、教育分野においても様々な情報サービスが利用できる社会環境の整備が進み、ＩＣＴ利活用能力の育成が強く求められるようになった。

こうした中、国際社会の中にあっては、経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）が、今日の「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに必要な、生活の中で生きていく能力を「主要能力（キーコンピテンシー）」と位置付け、社会変化に対応できる能力を身に付けることが重要であるとし、ＯＥＣＤが世界規模で行う生徒の学習到達度調査である「ＰＩＳＡ調査」の在り方についても、21世紀型スキルの測定方針が示され、2009年調査からはデジタル化の取り組みが導入された。この方針に基づき、2015年調査では、読解力調査、数学的リテラシー調査、科学的リテラシー調査、全てについて、紙による筆記型テストからコンピュータ利用併用型に切り替わり、参加者一人一人の能力の測定と参加国の状況をより正確に把握することが決定されている。

シンガポールや韓国など、教育分野での情報先進国といわれる国々では、かなり以前から、ＩＣＴを未来の国づくりにつながる新しい分野として位置付け、教育の場においてもＩＣＴを積極的に活用する取り組みが進んでおり、他に先んじる形で、グローバル化や知識基盤社会の進展を見据えた、国をあげての教育の情報化政策が進められ、ＰＩＳＡ調査等においても高い評価を得ている。

我が国でも、これまで「ＩＴ新改革戦略」（平成18年１月）や「i-Ｊａｐａｎ戦略2015」（平成21年７月）の策定、公表など、教育の情報化に向けた継続的な取り組みが進められてきたが、平成22年10月には「教育の情報化に関する手引」が、また、平成23年４月には「教育の情報化ビジョン」が策定・公表され、ＩＣＴを利活用した教育の重要性が指摘されている。

特に、この「教育の情報化ビジョン」では、21世紀を生きる子どもたちに対して、確かな学力、豊かな心、健やかな体といった「生きる力」を育むことが求められ、これからの教育には、正確な知識・理解を基にした応用力、創造力が必要であるとされている。また、そのための方策として、「21世紀にふさわしい学びと学校の創造」を目指した国の総合的な方策が示され、2020年度に向けて実施する主な施策として、「安全安心な環境のもと、子どもたち一人一台の情報端末による教育の本格展開の検討」が明示された。

こうした中、佐賀県教育委員会では、校務事務の効率化や教育の質の向上を目的に、これまで教職員一人一台の校務用パソコンの整備やＩＷＢの試行的導入、県独自のeラーニング教材の開発、家庭学習の充実を目的としたインターネットを活用した学習プリント配信システムの試行的運用等、様々な形で教育の情報化の取り組みを進めてきたが、その結果として、ＩＣＴ利活用教育は学力向上の有効な手段として本県教育の質の向上につながるものであり、今後の教育を左右する喫緊の課題であると判断し、平成23年度からは、教育の情報化の

推進目標と実施工程を具体化した「先進的ＩＣＴ利活用教育推進事業（以下『推進事業』という。）」を、佐賀県総合計画2011において県の最重要施策に位置付け、全県規模で教育の情報化に取り組むこととした。

現在、この実施工程（工程表）に基づき、「電子黒板や学習者用端末等のＩＣＴ機器の整備」と「全教職員を対象としたスキルアップ研修の実施」及び「校務管理機能と学習管理機能（ＬＭＳ）及び教材管理機能（ＬＣＭＳ）を統合した県独自の教育情報システムの構築・運用」に一体的に取り組んでいる。こうした教育の情報化の取り組みは、これまでも全国各地の学校や教育委員会においても実施されてきたが、本県のように県と市町及び学校現場とが一体となった組織的な取り組みは、全国的にみても、実践事例はほとんどない。本県では、これまで、韓国やシンガポール等の取り組みなども参考としながら、また、総務省「フューチャースクール推進事業」や「地域雇用創造ＩＣＴ絆プロジェクト（教育情報化事業）」、文部科学省「学びのイノベーション事業」などの委託事業等も活用しながら、市町立小・中学校や県立中学校（併設型中学校）、特別支援学校及び県立高校を対象に、本県独自の実証研究に取り組んできたところである。

本県では、こうしたこれまでの取り組みの結果、ＩＣＴ利活用教育の導入は、教師の指導の質の向上や児童生徒の学びの質の向上及び学校運営の改善につながること、また、例えば、通常の学校や学級での学習活動が困難である場合であっても、いつでもどこでも良質な学習機会の提供が可能であることなどの実証結果が得られた。各実証校からは、学校にＩＣＴ機器が導入されたことで、子どもたちは目を輝かせ、集中して授業に参加するようになったとの多くの報告がなされているが、同時に、こうした教育の情報化を推進し、期待する教育効果を得るためには、確かに、ＩＷＢや学習者用端末及びデジタル教材の整備並びに校内ＬＡＮの改修及び無線ＬＡＮ環境の構築など、ハード面の整備が必要となるが、子どもたちの興味関心を確かな学習効果につなげるためには、教師の指導力が重要であるとの指摘がなされている。

「教育は人なり」との言葉もあるが、ＩＣＴ利活用教育の実施に当たっても、児童生徒の指導に当たる全ての教職員がＩＣＴ利活用教育推進の趣旨を十分に理解し、必要な指導力を身に付けること（資質向上）が何よりも重要であり、基本であることを改めて確認する結果となった。こうしたことから、本県では、現在、ハード面の整備にあわせて、教職員研修にも一体的に取り組んでいるが、加えて、佐賀県公立学校の教員採用試験においても、平成23年度からＩＣＴ利活用教育に関する設問を設けているが、平成25年度からは、第二次試験（最終試験）において、電子黒板を用いた模擬授業を導入することとしている。

これから、佐賀県では、小・中学校に加え、高等学校や特別支援学校（小・中・高等部）においても本格的にＩＣＴ利活用教育を実施することとなるが、ＩＣＴ機器の整備から教育情報システムの運用、人材育成（教職員研修と新規教員の採用）まで、全国の自治体や学校が教育の情報化を推進していかれる際に必要となる情報収集の場として活用していただければ、本県としても励みとなり、なお一層の取り組みの充実につなげることができるものと考えている。

●著者プロフィール●
福田 孝義
佐賀県教育庁教育情報化推進室室長
元佐賀県教育庁教育政策課教育企画監
元佐賀県教育庁企画経営Ｇ副課長
元佐賀県立唐津東中学校・高等学校教頭

クローズアップ！教育の現場

教師の眼・子どもの目

福島県 会津若松市立第二中学校
元校長　室井 文輔

見て見ぬふりはならぬ

我々の現職時代は「学習指導」と「生徒指導」が、時と場と内容により、それ相応に対応できていた。今の教育は理念や信念を持っていてもないかの如しで、なかなかその成果が見えにくい。特に、いじめにおいては加害者・被害者の言動を見逃し、見て見ぬふりをしている子どもたちが存在しているのに、有耶無耶にし、ぼやかしてしまうのがいちばんの気がかりである。教師の眼（温かさ、厳しさ、正義感）が心に宿っているならば、正しく情報を収集し、対応も可能になってくる。「運命に挑み、使命に燃える」、そんな教師の出番に期待したい。

何事も“はじめ”が肝心

ある教師によると「教育で大事なことは自由であり、教師が子どもを尊重すれば自主性、創造性、友情はおのずと育っていく」と。そんな学級ほどわがままな言動が多くなり、そのうちに学級崩壊がはじまる。人として生きるルールを身に付けさせていかなければ、やがては子どもや親、同僚から反発を招くだけ。けじめのない教育からいじめが生じ、体罰にもつながりかねない。何事も“はじめ”が肝心であり、そして根負けしないことが教育の原点である。

暴れ心を消し止めた消火器

突然、職員玄関を蹴るＫ君。「ヤメロー！」（教え子を怪我から守る教師使命に燃える声）と必死になるも空回りするばかり。一瞬の閃きで、「壊れたら直すから、もっと強く蹴れ！」と開き直る。激痛か骨折を恐れたのか、捨てぜりふを残して立ち去るＫ君。午後のホームルーム時に再び登校し、今度は教室内で消火器を噴射。真っ白になった床や机を掃いて拭く級友たち。これを見ていたＫ君は、ただ呆然と立ちすくむ。以後、Ｋ君の暴れは影を潜める。また、他校の仲間が学校を抜け出して来ると追い返し、トラブルが生じれば仲介に入りおさめる。教師集団は「やっかい番長」として目を背けていたが、あまりの変身に驚く。平常心を取り戻していった。Ｋ君の目は美しく輝き、心には正義の芽生えがはじまる。

（ 著者画 ）

どんな生徒にも、いかなる場面でも愛情を注ぎ、差別せず、見捨てず、見て見ぬふりをしなかった教師の眼。私はＫ君を主人公に仕立て、「尊敬する番長」として付き合っていくことにした。

校長の卒業証書と成人式

卒業式でのＫ君。卒業証書を手にし、大粒の涙が流れ落ちた。師とは人の範なり。人を導き、尊敬・信頼の基盤が築かれた瞬間だった。だからこそ最後は今流行の別れの歌よりも、「仰げば尊し、わが師の恩……」と歌ってもらって別れたかった。それは後になって叶えられた。

式終了後、「校長先生に卒業証書」ということで、卒業生、保護者同席のもと、私のための卒業式が行われた。たどたどしい筆字書きではあったが、「あなたの最後の生徒になれて幸せです」という文面に感激し、感動で胸が詰まった。「教育に嘘はない。教育の基本は感動であり、感動こそ人間が人間として生きる証である」ことを誇りに思った。

数年後、荒れる成人式を迎えたＫ君だったが、番長時代の経験を生かして静かな式を取り戻してくれた。私にとってＫ君は英雄的存在となった。

教師は子どもや親の心を鋭く見抜く力を身に付けることで、教育の喜びや感動を得るものである。

教育情報 2号　CD33190
日文教育資料
平成25年（2013年）4月1日発行
編集・発行人　佐々木秀樹
本書の無断転載・複製を禁じます。

発行所 日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/
東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618
大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171